
吸血鬼の噂話

Douke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼の噂話

【Nコード】

N4036Y

【作者名】

Douke

【あらすじ】

こんな吸血鬼童話はいかがですか？

「お主はバカか？」

青年が旅をしている途中でたどり着いた村では、奇妙な噂話があった。

村はずれに新しく住み着いた魔女がいるとの事。

村人たちは気味悪がって見に行かない。

そこで村を出るついでに本当かどうか見に行ってみた。

するとそこには小屋があつて。一人の少女がいて。青年が声をかけてみたら、少女の最初の一言がそれだった。

「今どき魔女なぞ馬鹿馬鹿しい。さすがは人間じゃな」

「ちよつと待て。俺が言つたわけじゃないからな」

「そんなのは分かつておる。だがそれを信じたお主も同じではなかるうか」

「うっ。確かにそうだが……」

「用は済んだじゃろ。ならばさつさとここから立ち去れ」

そう言つて少女は小屋に戻ろうとする。

「待て。お前は本当に魔女なのか？」

「馬鹿馬鹿しいと言つたはずじゃ。仮に我が魔女だしたらこんな事を言うはずがなかるう」

「なら、お前は一体なんなんだ？」

姿は可愛い少女なのに、雰囲気は青年よりも大人とを感じる。

他にも口調が少女の外見に合っていない。

「……私の事を知ったら、お主は立ち去るか？」

「ああ」

青年のきつぱりとした言葉に、少女はため息をつきながらもこう言つた。

「我は吸血鬼。人間の血を吸う化け物じゃ」

「……吸血鬼？」

「そうじゃ。とはいえまだ成り立てじゃがな。さあ、血を吸われたくなければさっさとここから立ち去れ」

「……………」

青年は目の前にいる少女から目を離せなかった。

少女はそんな青年を見て、不振感を抱いた。

「なんじゃ気持ち悪い。我の顔に何かついておるのか？」

「……初めて吸血鬼なんて見た」

「そりゃそうじゃろな。今この時代、吸血鬼の数も減ってきておる」

「おーすげー」

普通吸血鬼と聞けば、大抵の人間はその場から逃げ、村人全員で退治しようとした。

けれどこの青年は少し変わっていて、なんというか人一倍好奇心が強いのだ。

だから吸血鬼だと言われても、逃げるのではなくむしろその存在をもっと詳しく知りたがった。

「なあ質問してもいいか？」

「……お主はバカか？ さっさと立ち去るなり村人を呼んで我を退治すればよからう」

「なに言ってるんだ。吸血鬼なんて稀じゃないか。もったいない」

少女が何を言っても、青年は立ち去らなかった。少女は諦めて青年を無視し続けた。それでも青年はしつこく付きまとった。

「なあ吸血鬼になったら長生きできるのか？」

「知るか」

「そういえば、お前って今いくつなんだ？」

「今年で百五十二じゃ」

「おー、どうやってたら吸血鬼になれるんだ？ やっぱ噛まれたらか？」

「そしたら今頃吸血鬼だらけじゃろうが」

気が付けば、青年は少女の小屋に住み着いていた。毎日のように質問を繰り返し、少女の傍から離れなかった。

そんな青年を少女は不思議に思っていた。

この時代、吸血鬼と魔女は忌み嫌われていた。

ある意味当然だろう。吸血鬼は人の血を吸い、魔女は妖しげな言葉を使って人には出来ない事をする事が出来る。

だが、それだけのだ。

吸血鬼だっていつでも人の血を吸っているわけではない。これは何日も彼女を見て分かった事だが……。

「……お主はバカか？」

「うおっ！」

青年は急いで日記帳（もとい観察日記）を隠して少女に向き直った。

「なんで人が書いてるのを盗み読みしてるんだ」

「お主が見られるような所で書いておるからだろう」

「だからって……プライバシーの侵害だ」

「お主はたまにおかしな言葉を言うの。それよりお主は何故そんなものを書いているのだ？」

すると青年は自慢するかのように胸を張って、

「これを元の本を書くつもりだ！」

と言った。

「……馬鹿馬鹿しい。そんな物を書いても誰も信じるものか」

「そんなの、やってみなきゃ分からないじゃないか」

少女は少し一緒に暮らして、青年についてこう思っていた。

こやつはただのバカだ。

「すくなくとも、俺は信じてる」

けど、真剣な眼差しで再び書き始めた青年を見て、ほんの少しだけ青年が書く本に賭けてみたいと思った。

ある日のこと。

青年がいつも通り近くの村に買い物をしようとしたら、村から少女が暮らす小屋に向かってたくさんの方々が、シヨベルや斧を持って歩いてる姿を見た。

青年は急いで小屋に戻ると、少女をたたき起こした。

吸血鬼はどうやら朝に弱く、日ざしが高くなるまでずっと寝ている。

だから食材などは青年が買うようになっていた。

「……むー、一体なんの騒ぎじゃ」

「おい起きろ！ 村の人たちがお前を殺しにやって来た！」

「……ふん、自分らに脅威を覚える存在は殺す、か。さすがは人間じゃな」

「何言ってるんだ！ 早くここから逃げないと……」

「我は逃げぬ」

少女はいつも通りの口調で言った。

「お主だけ逃げろ。巻き込みたくないからの」

「お前……」

「我は生きてはいけぬ存在じゃ。生きるか死ぬかなら迷わず死を選ぶ」

平然と言い放つ少女の顔は、むしろ凛々しいと感じてしまうほどにきちつとしていた。

しかし青年は気付いた。気付いてしまった。

その少女の手が震えているという事を。

だから青年は怒りを少女にぶつけた

「ふざけんな！！」

「っ！？」

突然大声を出した青年に少女は驚いた。

「なにが生きちゃいけない存在だ！ お前だって、吸血鬼だって自分で言ってるけど一度も俺の前で血を吸わなかったじゃないか。お

前は吸血鬼じゃない、人間だ」

「……何を言っておるのじゃ、お主は。我は吸血鬼なのじゃぞ」

「たとえお前が吸血鬼だとしても、俺はお前が死ぬべき存在だとは思えない。むしろ生きろ。生きて生きてもつと人生楽しめよ」

「……お主はバカじゃ。これまでに我がどれほど人間を殺してきたと……」

「ならその人たちの分まで生きろよ。それがお前の役目だ」

「……なら、何のために生きろと」

少女は青年に向き直って言い返した。

「我は我の殺した人間の分だけ何をしろというのだ！ 我は吸血鬼じゃ！ 血を吸うことしか出来ぬ我に何ができるのじゃ！」

「俺のために生きろ」

その言葉で、少女は世界が変わった気がした。

「お前が背負う重荷を俺にも背負わせる。今、ここにお前に生きて欲しいと願う人間がいるんだ。ならその人間のために生きてくれよ」

「お主……」

青年は優しく少女を抱きしめた。青年の言葉一つ一つが、少女の心に溜まっていた暗い何かを光に変えてくれた。

いつの間にか少女は泣いていた。

「……我は、生きても良いのかの」

「ああ。俺がそう願っている」

「……お主はバカじゃ」

「ああ、分かっている」

「……死にたくない、死にたくないよお……」

そこには今までの吸血鬼はおらず。

ただの少女が泣いているだけだった。

「ここから逃げよう。そして俺と一緒に旅をしよう」

青年と少女は逃げ続けた。

いろんな町を転々と移り、時に森の深いところで野宿をし、時に

おそいかかる人間を殺し、時にケンカをし、時に笑いあい……。そんな旅にも、終わりが訪れた。

旅をしている最中、青年はある病にかかったのだ。その病は医者でも治すことが出来ない不治の病だった。

青年と少女は、人里から遠く離れた場所で静かに暮らし、薬の飲んで残り少ないわずかな時間を、少しでも、ほんの少しでも延ばし続けた。

「お主、大丈夫か？」

「お前が心配してくれる日が来てくれるとはな……。こりや明日は晴れるかな？」

「お主はバカか。そんなこと気にしないで、今はお主の体を心配しろ」

「そう言われてもな……。ごほっごほっ」

「お主！」

「あーまだ大丈夫だ。それより、俺の鞆取ってくれないか？」

「こ、これか？」

青年は少女から鞆を受け取ると、中から一冊の本を取り出した。その本とは、青年が少女と出会った時から書き続けていた日記だった。

「これをお前にやるよ」

「な……。しかし、これは……」

「どうせ俺はもうそろそろ死ぬ。それは誰よりも分かってる事だ。中身は日記と言うよりもお前の観察帳みたいになってるけどな……」
「お主がしようとしたことはどうするのじゃ！ これを元に本にするというのは……」

「ああ、お前に任せるよ。俺がやるには少し恥ずかしいからな」

「恥ずかしい……？」

「だから読むときは、俺が死んでからにしてくれ」

数日後、青年は息を引き取った。

「……あれから百年か。お主のおかげで、死にぞびれたではないか」
一人の少女が、墓の前で呟く。

「お主があの時我を止めたから、我はお主が死んだ後孤独になつてしまつたではないか。どう責任を取るつもりなのじゃ」

死んでいるはずの青年に向かつて、墓の前で呟く。

「お主のおかげで、吸血鬼の存在が認められるようになったぞ。まさかお主が我でも知っている小説家だつたとはな」

少女は一冊の本を、墓の前に置いた。

「お主の代わりに我が作つた本じゃ。お主の本よりはつまらんじやろうがな」

青年は旅人でありながら、その旅を小説として出していた。青年が出す本はとも現実味があつて、とても楽しく、まるで旅に出ているかのように感じる本を何冊も出していた。

そして少女は青年の代わりに最後の本を出した。青年が最後に渡した日記帳を元にして。

「それにしても、こんな事を書くなんて。確かに恥ずかしいの……」
青年が日記帳の最後のページに書いた言葉。

『死んでもなお、俺はお前の傍にいる』

「ほんとにお主は……バカじゃの」

THE END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4036y/>

吸血鬼の噂話

2011年11月11日03時19分発行